

特別寄稿

和泉山脈の自然を生かす構想

津田直則

1 近畿自然歩道と南大阪再生構想

私が和泉の国自然観クラブの会員になる申し込みをしたのは2013年の11月だと思いますが、これまであまり活動に参加しておらず不心得な会員です。申し訳ありません。機関誌の記事としても趣旨が少し違うかもしれませんが、執筆の機会をいただきましたので和泉山脈の自然を活用する考えを述べさせていただきます。

昨年春に桃山学院大学を70才定年で退職しましたが、それまで10年間、和泉山脈のあちこちで学生たちとボランティアで里山活動をしてきました（専門は経済学なのですが）。その活動の基になったのは、和泉山脈の尾根を走る近畿自然歩道を完成させたいという願いでした。2004年に紀伊山地の霊場と参詣道が世界遺産になりましたが、その前年にこの世界遺産の話を知り、どうかしてこの世界遺産と泉州をつなぐことができなかと考えて思いついたのが、近畿自然歩道を歩いて南大阪と聖地である熊野大社をつなぐという案でした。大阪府の自然歩道担当者を何度も訪問し、ダイヤモンドトレールや和泉山脈の尾根を歩き回り、道を研究している人たち（和泉市の仏画師藤原重夫さん他）に聞き、2003～04年にかけて色々調べた結果次のようなことが分かりました。

①近畿自然歩道は、和泉市槇尾山が終点であるダイヤモンドトレールまでは完成しているが、そこから泉南市方面までの近畿自然歩道はあと僅かであるがまだ完成していない（歩行が危険で誤ると谷底に落ちる箇所もある）。②近畿自然歩道の事業主体は、大阪府と和歌山県であり、府県境を通過しているため完成のためには両府県が力を合わせる必要がある。③ダイヤモンドトレールから和泉山脈尾根には1300年の歴史がある修験道の道が通っているが、この道を中心に整備して近畿自然歩道が作られたため、双方の道は重なり合う部分が多い。④近畿自然歩道と和歌山県の熊野古道は、JR 山中溪駅の近くで交

差する。⑤和歌山県の熊野古道も近畿自然歩道に指定されているので、自然歩道が完成すれば修験道の道から熊野古道へと近畿自然歩道を通って行ける。⑥大和と堺を結ぶ竹ノ内街道は天智天皇が作った1400年の歴史ある街道であり二上山の麓で修験道の道と交差する。⑦和歌山県熊野古道は、1000年以上の歴史があるスペインのキリスト教聖地サンチャゴ・デ・コンポステーラへ向かう巡礼道と姉妹提携している。⑧以上の3つの1000年を超える歴史街道は、奈良県、大阪府、和歌山県にまたがる金剛生駒紀泉国定公園を通過する（図1参照）。

<図1 千年道をつないで聖地に至る>



以上のような情報を総合した私の結論は、竹ノ内街道、修験道の道（近畿自然歩道）、熊野古道（近畿自然歩道）という1000年を超える3つの歴史街道の結合により、和泉山脈の自然を活用した南大阪の再生構想を考えることでした。具体的には、自然歩道の幹線に沿って枝道を増やし、南大阪全域の和泉山脈の麓に里山公園を整備し、里山公園をつなぐ里山歩道やサイクリング道路を張り巡らし、子供から高齢者までの憩いの場所を整備していくというものです。もちろん和歌山県側でも同様の構想が可能です。私が03年7月に作成したパワーポイントには次のような具体案が残っています。各地に拠点となる神社や寺などを選び、それぞれの地域のニーズに応じて、野鳥が好きな人には野鳥が集まる場を整備する、昆虫が好きな人には昆虫館や

学習機会を提供する、高齢者にはゆったり過ごせる憩いの場を整備する、子ども・青少年にはキャンプ場・合宿場を創設する、熊野大社に向かう人には信仰・巡礼の道を検討する、温泉場に宿泊したい人には温泉を掘削する、日帰りで楽しみたい人へはアクセス道路の整備を行うなどです。

私は以上の案を抱えて、大阪府や和歌山県の自然歩道の担当者に何度も会いに行きました。しかし、「和歌山県は世界遺産に指定され財政的に今はそれどころではない」「大阪府は財政的に困難な状況である」と見通しはたらず、構想は長期的に検討していくしかありませんでした。今でもこれらの案は私の中で生きています。ところが当時から10年を経て今ようやくチャンスが巡ってきました。しかしこの話に入るために、学生と一緒に10年続けてきた里山活動の話を少し寄り道をいたします。

2 学生たちとの里山活動

上のように、近畿自然歩道の整備は、財政上の問題で壁にぶつかっていたために諦め、当面は構想の一部である里山公園を具体化する一環として、荒れた里山の再生問題に取り組むことにしました。ちょうど04年に、泉佐野市の公園緑化協会が里山の再生活動に取り組む提案をしていたのを知り、私は学生と一緒に参加することになったのです。場所は、阪和自動車道の上之郷インターチェンジを降りてすぐの里山で、泉佐野コスモポリスと呼ばれ、大阪府が里山25万坪を買収して研究施設を中心とした開発を計画していましたが、バブル崩壊で手付かずのまま破綻したところでした。里山は荒れ放題でジャングルようになっていました。私どもが活動したのは同じくジャングルになっていた泉佐野市の公園予定地で、大阪府の土地と隣接していました。

04年から06年まで3年間でジャングルの草を刈り1000本の山桜の苗を植えました。現地には野生の山桜がたくさんありますが、太いものは大人一人でも幹の向こう側に手が回りません。参加メンバーは、桃山学院大学と和歌山大学の教員及び学生たちの共同チームで、資金は桃山学院大学で「南大阪再生プロジェクト」という

共同研究を申請して、カマやノコギリや1本280円の苗などを購入しました。当時この活動のためのホームページを作成していましたが、これを見たある企業が賛同して千本のうちの300本の苗は寄付してくれました。とはいえ、この植樹活動は激務を伴う大変な活動になりました。山桜を植えた場所の半分は阪和自動車道の建設でた瓦礫を埋めた場所であったため、植樹した苗は何度植え替えても大半が枯れてしまい、最終的な苗の活着率はたった15%ほどでした。水がない低い里山であったので2年目からはため池を3カ所に掘ってペットボトルを集めて水やりをし、カマでは草刈りが進まないため草刈り機を購入して年に何度も草を刈り、学生たちは教室では地域再生や自然環境の理論学習をし、土日は夏も冬も雨の日も肉体労働者のように働きました。でも学生たちは生き生きとしていました。虫を嫌って陰でこそそそしていた女子学生も、2年間の活動を終えて卒業するころには、「家でゴキブリを見つけたら新聞紙でバシっとたたけるようになりました」とけらけら笑っていました。学生たちの地域貢献活動は里山活動だけではなく、堺市での祭りの支援、和泉市のジャズストリート支援や市民歌舞伎支援などの街づくり活動も含まれていますが、体験学習の長所は里山活動で最大限に発揮できたと思います。

09年の春には山桜の幹も太くなり、初めて花が咲き始めました。ところがこの年にとんでもないことが次々と起こり泉佐野から撤退することとなりました。詳細はここでの趣旨と異なるので省きますが、現地で植樹指導をしていた公園緑化協会の現場責任者と大学側との考え方の違い、並びに、公園緑化協会と大阪府が里山の使用を巡って激しい対立を始めたため大学が板挟みになってしまったことが原因です。緑化協会の職員たちからは慕われ、活動を続けるように引き留められましたが、この地での活動の潮時だと判断し、活動現場を和泉市や堺市に移しました。でもこれが次に見るように南大阪再生構想の復活への道につながったのです。

3 森づくりと地域再生構想

09年からの大学の里山活動は、泉佐野コスモ

ポリス跡地での活動を撤退し、和泉市父鬼での人工林の間伐、松尾寺公園での竹林の間伐・整備、堺市・和泉市での農家支援などへと変わりました。これに先に述べた街づくり活動を含めると、地元中心の地域貢献活動に移っていったわけです。ところが、この流れが数年続いた12年2月に突然、大学に大阪府鳳土木事務所からの訪問者がありました。榎尾川のダム建設が中止となり、森づくりで洪水対策を行うことになったので協力してほしいという要請でした。説明を聞きその構想に大変興味を持ったのでお引き受けしたところ、早速その年4月から月1回の森づくり活動が始まりました。

その当時から15年春で丸4年が経過しましたが、その間に参加大学も、大阪産業大学、大阪府立大学、同付属高等専門学校等へと拡大し、教員、職員、学生たちの総勢はいつも30~50人になりました。また参加する活動は大変多様でした。外来種雑草ナルトサワギクの駆除、スギ・ヒノキの人工林の伐採、竹の伐採と竹ポットづくり（ドングリの種を入れ苗を育てる）、榎尾川周辺の道の整備、山土からの種採取、育った広葉樹の苗の移植、森・川・海をつなぐイベント、榎尾っ子まつり、和泉市「いずみいのちの森プロジェクト」との連携植樹、地元地域の魅力を伝えるための学生による「まきおもい」という名の冊子づくり、学生による将来計画や企画書づくり等々です。秋のイベント時には参加者数は1000人を超えます。ダムや道路の建設が専門の土木事務所が最初に考えていたのは、種から育てる森づくりを街づくりと結合し、NPOを設立して管理するという構想でしたが、土木事務所が地域や大学を巻き込んでいった森づくり案というのは大変希有な例であると思われる。

今では、異なった大学の学生たちの間に友情が生まれ、ダム賛成派だった地域の人々にも森づくりに協力する流れが生まれています。例えば、地元では温泉を掘って憩いの場をつくらうとの考えが広まっています。森づくりをきっかけに、過疎地域の問題を自分たちで解決しようとの意欲が出てきたのです。また、森づくりに参加するいくつもの大学の学生からなるグループ勉強会では、自分がしたいこと、自分が

できること、地域で求められていること、という3つを組み合わせる新たな企画づくりをしようとの案が発表されました。いずれ具体化していくものと考えられます。

ここからは私の意見ですが、前に述べた近畿自然歩道とつないで観光ルートを整備することも可能です。近畿自然歩道には山の尾根を走る幹線がありますが、この幹線からでている枝道が和泉市には2本あります。1本は、起点が榎尾山の施福寺で終点がバスの榎尾山（終点）と和泉市青少年の家の中間あたりになっています。もう1本の枝道は、起点が国道480号線の鍋谷峠で、国道を少し歩いて林道に入り終点は父鬼町です。これら2本の枝道は近畿自然歩道として指定されていますが、整備はあまりされていません。また枝道をさらに延長することは環境省が認めてくれないそうです。しかし和泉市が独自に観光スポットを作成してこの枝道とつなぐことは可能でしょう（図2参照）。

この2つの枝道とつなぐ観光スポットづくりとして次のような例が考えられます。第1は、1000年の歴史を持つため池である納花町谷山池周辺から松尾寺公園にかけてを自然公園として保存する方法です。谷山池は東大寺を再建した重源というお坊さんが四国讃岐から鍛冶職人等と呼ばせ造営したと伝えられています。和泉市が考える案としては、父鬼まできている近畿自然歩道の枝道を市の自然歩道として延長し、外環状線の大野北の交差点から農免道路に沿った道を作り、谷山北池、谷山池、松尾寺公園へとつなぎ、自然歩道と自然公園として整備するのです。第2の案は、もう一方の施福寺からの枝道について、枝道の終点をさらに和泉市の自然歩道として延ばしていく案です。その延長上には青少年の家や森づくりの現場がありますので、この地域を自然公園として整備する方法があります。上の①②で述べた地域住民の思いや学生たちの企画とつなぐと、市民のための憩いの場所にできるでしょう。

憩いの場づくりとは別に、地域再生の別案として、若者による森林事業が和泉市で始まろうとしています。これは協同組合の人たちが企画しています。15年4月から政府による生活困窮者支援事業が始まりますが、この補助金を活用

して若者を集め、職業訓練をして人工林の間伐ができるようにし、間伐材はエネルギー、建設、木工などの別の事業と結合して展開していこうとする企画です。森林の再生にもつながります。この協同組合による森林事業は、すでに兵庫県豊岡で14年から始まっており、就労と生活が成り立つめどが生まれています。広島や東北地方にも同様の試みが広がり、和泉市でもできないか検討がすすんでいるのです。この企画を耕作放棄地での農業とつなぐ道も十分ありえます。私は最近、これら事業をつないで新たな地域コミュニティを形成する構想を発表しています。

以上で自然歩道や自然公園による憩いの場づくり、森づくりと地域づくりの結合、森林事業などの事業をつなぎ新たなコミュニティづくりを始める企画について述べてきました。和泉山脈や里山や農地は過疎地域であっても資源の宝庫です。創造力を発揮すれば、事業だけでなく新たな文化の創造や歴史の再発見にもつながると思います。自然を保全し、自然と共に生きていく共生思想は日本が世界に誇る文化です。自然を破壊しては人類の未来はありません。和泉山脈の自然を生かす方法を共に考えていき

ましよう。

注：近畿自然歩道（赤線が大阪府、黒線は和歌山県の整備担当）の右の端がダイヤモンドトレールの終点の施福寺です。そこから左上に伸びる細く短い枝道があります。もう1本の枝道は、鍋谷峠から真上に父鬼まで長く伸びています。（大阪府環境農林水産部みどり推進課自然公園グループ資料）

経歴：1944年生まれ。1968年神戸大大学院経済学研究科修士課程修了。大分大学経済学部勤務、経済学博士（神戸大学）。桃山学院大学経済学部教授。NPO法人共生型経済推進フォーラム理事長。協同労働の協同組合法制化・関西市民会議代表。コープこうべ生活協同組合理事など歴任。

著書：『計画と市場』（共著）勁草書房、『堺の伝統産業』（共著）、堺市経済局工業課・桃山学院大学総合研究所、『現代経済体制と経済政策』（編著）晃洋書房、『生協総合評価の方法と実際』コープこうべ・生協研究機構、『南大阪地域再生に向けての構想と実践』RPSセンター印刷など多数

<図2 近畿自然歩道の幹線と枝道>

